

小池辰雄著作集第一巻『無者キリスト』を読む(1)

『無者キリスト』 総序、第二部 人間の福音的実存七相 一「破れ」

2001年3月18日(東京 新宿)

奥田 昌道

『無者キリスト』総序 第二部 人間の福音的実存七相 まえがき 第一相 破れ「姦淫の女」 捕われた女 放蕩息子 この譬話の構造 祈り

●『無者キリスト』総序

皆さん、お早うございます。今日は、小池先生の著作『無者キリスト』の話をしたと思います。その「読書会」といえば語弊があるかもしれませんが。月一回、私に先生の著作の中から何かを取り上げて話してほしいということなので、『無者キリスト』を取り上げることにしました。

これまで4回にわたって『聖意体现(主の祈り)』をお話させていただきました。それは終わったけれども、

「やはり月一回ずつ何かしつかりとした著作を読み、それについて私を通して話すのを聴くという機会がほしい」

というご要望がありました。私もそうしたことは大事なことだと思いましたので、それで先生の著作で何がいいだろうかと考えてみました。やはり、まずはこの『無者キリスト』を取り上げることにしました。皆さんは何度もきつとお読みになっていらつしやると思う。

『無者キリスト』は、小池先生にとつてはやはり出発点です。何でも「第一巻」というのはもの凄く大事なんです。第一号、第一巻ですね。「曠愛新書」ならば第一号は『福音の心臓』というコリント前書13章の愛のところでした。すべて「第一」というときには、本当に全力投球する。もちろん、そのあとそうなんですけれども、とりわけ第一巻というものは自分のすべての力をそそぐという、そういった姿が見られます。この著作もまさにそうで、1975年の秋に出たけれども、それまで5年か6年か7年か知りませんが、もう耳にタコができるくらい、

「今に凄いのを書くから、今に凄いのを出すからね」

といって、先生は何度も言われました。大体、先生は予告する期間が長い。いつも、

「そのあとは大詩篇を書くから」

ということをやつと言いつつ続けてこられた。予告することによって自分を励ましておられるのではないかと思う。そういうところがあつて、こちらは本当に楽しみにしていた。しかも、



この『無者キリスト』には、部分的にかつての原稿を入れている所もあります。例えば、「霊の貧者」というのが収録されていたりとか、「天鐘」というのもかつてのものが収録されているとかいうふうに、部分的にはそれまでお書きになったものに少し手を入れて、ここへ収録しておられますけれども、かなりの部分が書き下ろしなんです。

私は忘れもしません、今日取り上げますが、「地にももの書き給うイエス」というのは松崎でお話になった。伊豆半島の方です〔註：1972/8/25 第19回夏期福音特別集会(伊豆松崎)第1回集会「地にももの書き給うイエス」(ヨハネ8・1～11)〕。

そこで原稿をお読みになりながらお話になった。私はそれまでこのヨハネ伝のエピソード――姦淫の場で捕らえられてイエスのもとに引き出されてきた女性のお話――について、小池先生のお話を聞いたことがなかったものですから、あの「地にももの書き給うイエス」というのは、いたく感動いたしました。「放蕩息子」の所も素晴らしいし、その他そういうものが随所に出てきます。

私はこれを取り上げますときに――第一部、第二部、第三部の構成となつていますけれども――まず第二部から取り上げていこうと思つています。この全体のスケッチのところをちよつと見てみますと、「総序」というのがあります。それをまず見ていただこうと思います。総序というのがあつて、それから第一部、第二部、第三部と別れていますから、それぞれの所にまた「まえがき」があります。それで先ず、総序から読みます。

《総序》

この『無者キリスト』は、神学的論説か、文学的叙述か。または聖書註解か、説話集か。それらの要素は然るべくふくまれてはいる。しかし本書は、その本質的な性格からいうと、聖書という神的ドラマの中に躍り込んだら、キリストの福音が私をとらえたので、その力に迫られながら、如上の要素を通して書かしめられた告白であるといつたらよいと思つている。

私は第一巻が大事だと言いました。それからまた、「まえがき」といいますか、この序がまた大事なんです。この『無者キリスト』というのはどんな本かと。

「聖書という神のドラマの中に自分が躍り込んだ。そうしたら今度は、神さまの側から押し出されて、福音が私をとらえた。とらえられた私が自ずと告白させられた告白である」

という。先生の話されたもので、この集会が主になって出しておられる本は全部、「キリスト告白録」という題が付けられています。先生は「すべて告白だ」と言われた。

「私は説教はしない。解説もしない。私は告白をする。キリストの中に躍りこんで、御言の中に躍り込んで、その中から私はものを言う。中から告白する」

と言つておられます。そのことがここに書かれているわけです。

キリストはどつという範疇にも属し得ない人である。また一切のイデオロギーを立ち



超えた人である。

正にそうです。この世の考え方はすべて限定したがるんです。

「キリストとはどんな人だ。キリスト教とは何々だ」

と、すべて「何々とは何々である」という定義をして、その中に閉じ込めようとする。ところが、先生はそれに対して猛反発された。キリストはいかなる範疇にも入らない。

「キリストはどんな人か、大変な人だ」

と、そういうことになる。

「神さまは愛である」

と言ったら、ダメだと仰った。

「愛という言葉で限定したらダメだ。愛を中心にしながら無限無量だ。だから、無」というよりしょうがない」

「ナッシング」(nothing 虚無)ではない。無限無量で充滿しているから、それを愛とか、聖とか、義とかそんな言葉の中に押し込んだら、神さまに対して失礼だ。もう愛も義も聖も力も生命も全部渾然と含まれた、限定できない何ものかです。だから、「無」だという。

「虚無の無ではない。充滿して限定できない無だ」

と。そういう捉え方です。そういうふうに捉えさせられた方というのは本当に少ないと思います。私たちは先生につながる者としてやはりそういう角度から、従来のキリスト教概念とか、日本人のいだいているイメージとか、そういうものを絶えずぶつ壊すという、これが試練なんです。我々が直面している試練は、世の人たちが

「こうじゃないか」

といって問いかけてくるところに、

「うん、そうではあるんだけど、実はそうではない」

と。頭から「そうでない」と言ったら、これはもう全然対話にならない。相手をつかまえるには、一端引くんですよ、ふつと懐へ入れて、そして

「実はそうではない」

といって圧倒してしまふ。そのこつです。私なんか絶えず人と接する立場にあります。大に学に務めていた時に同僚の賢い先生方、それから理屈の多い学生たち、そういういろんな方々といつもやり合う時には頭から、

「そうじゃない。あなたとはもう喧嘩別れだ」

なんて言ったら、全然ダメなんです(笑)。

「そうか、あなたはそう思っているのか。なるほど。ところでね……」

とか言って一遍引いて、今度は押し返す。そういうのが私たちの告白のやり方だと思う。

キリストはどういう範疇にも属し得ない人である。また一切のイデオロギーを立ち超えた人である。だから彼のふところの中に入って、そこから告白せしめられるのが、



私にとっては最も本質的なことである。そんな現実、そんな念願で、私はこの一書を書いた。

キリストは実に無私な人、それゆえにこそ無限にして無量な人であった。一切の限定を彼の実存は笑うであろう。そういうキリストであるから、彼を無的実存者、要約して「無者キリスト」と呼ばしていただくのである。

新約聖書のマルコ、マタイ、ルカ、ヨハネの四福音書は、いずれも素朴にして靈妙なるものであるが、マルコ福音書は、キリストの行為面を劇的に彫刻し、

マルコは行為の福音書だという。キリストはこうなされた、次はこうだったと、とんとんとんと話が進んでいくという意味で、行為面が劇的に彫刻のごとく展開されている。

マタイは言説面を詩的に表現している。

これは山上の垂訓とか、ああいうキリストの言葉そのものが韻律があつて詩のようだという。

ルカは心情面を絵画的に描写し、

ハートの福音書だと。「放蕩息子^{たとえはなし}の譬話」とか、そういうところに表れていますように、非常にハートが深い。

ヨハネは靈性面を音楽的に表出していると言えよう。

ヨハネは靈生の福音書で、一番深い湖のようだと。この辺も先生は非常にお考えになった言葉を使っています。劇的に彫刻し、詩的に表現し、絵画的に描写し、音楽的に表出する。それから、行為、言葉、ハート、靈の各側面に着目する。それぞれを対応させていて、心憎いですね。

であるから、イエスの行、言、心の三面をマルコ、マタイ、ルカの共観福音書が奇しくも有機体的にとらえ、そしてヨハネはこの三者を総括するかの如く、特に靈性面を深くとらえている。もちろん前三者の三相を一貫しているものは聖靈の事態であるが、

ヨハネにおいてそれが最も深くあらわれている。

その次の6行も非常に大事なところですよ。

四福音書の伝えるところは過去のイエスの啓示的事実であり、それはまた現在の我々に主体的に関わる現実であり、未来をひきよせる預言的終末的現実である。

四福音書の伝える過去のイエス——時間の流れからみますと、過去、現在、未来というその三相ですね——これは「啓示的事実」です。イエスがなさった一つ一つの事柄はビデオにおさめ、カメラでとらえることのできる、まさに我々が見、触り、確認できる事実なんです。それは歴史的な事実です。でありながら、それは一つの「徴^{しるし}」なんです。ここでは「啓示^{けいじ}」というふうに言われている。

神さまが永遠界から我々のいる相対界に切り込んできて、そして何かをお語りになっている。それがキリストの行為、あるいは言葉となつて表れている。だから、キリストの存



在そのものが神の言葉なんです。存在を通して語っておられる。例えば、イエスが舟板を枕にあの嵐の中で眠っておられるという姿。それはまさに神の言葉そのものなんです。

「これを見よ！ 刮目かつもくしてこの姿を見よ！ そこであなたは何を見るか？」

と。そういうものの連続なんです。十字架もそうです。イエス・キリストが我々の贖罪しよくざいのために十字架にかかってくださったこと、これはもう過ぎ去った出来事ですけれども、それは今も語り続けている。

「あなたの罪はそこで赦ゆるされている。私はあなたの罪をそこで背負った」

と。あの木の十字架は朽ち果てても、霊界に立っている十字架、霊なる十字架は今も立っている。そして、それは我々に迫ってくる。過去の啓示の事実が現在の現実となつて迫ってくるんです。ですから、ここにお書きになつていくように、

「過去の啓示の事実であり、それはまた現在の我々に主体的に関わる現実である」

と。現在の我々に、しかも主体的に関わる。これが大事なんです。単に客観的に描写されているだけではない。

「あなたに語っているぞ」

と迫ってくる。一対一で、そこに太い絆きずなというか、太陽の光がスーッと照らして相手を包むように、そういう形でつながらなければ何にも意味がない。そのことが

「現在の我々に主体的に関わる現実であり、そして、それは未来をひきよせる預言的終末的現実である」

と。そしてその次の言葉も凄いですよ。

福音書はそれゆえ、絶対次元が相対次元に、永遠が時間に、無限が有限にきりこんで

きた驚くべき現実である。

神さまの世界は絶対界でしょ、我々は相対界にいます。その絶対界からこの相対界に切り込んできた。本来は交わらないはずなんですよね、絶対次元とこの相対次元は交わらないけれども、それをイエス・キリストという方が切り込んできたという。もちろん、預言者の時代、旧約聖書の時代も神さまはいろんな形で切り込んでおられるけれども、イエスは最後の切り札です。今までにいろいろ預言者たちを通して神さまがこの絶対界から働きかけてきたのは、すべて本命としてのイエスを送る準備だった。イエスという窮極きゆうごくなお方が現れる、そのためにイスラエルの民族を鍛え上げて準備させたんです。律法もそうですし、モーセの十誡もそうですし、全部このイエス・キリストというお方においてそれが完成されるのであって、イエス・キリストを抜きにして旧約を旧約として読んだらダメなんです。旧約が全部、イエスの中でもう一回練り直されて、

「ああ、こういう関わりか」

と。例えば、モーセの十誡というものが福音の光の中で捉えとらえられる。いろんな儀式がありましたね。小羊を屠ほふつて献げるとか、それは全部イエス・キリストというお方において成



就したあの十字架にかかってくださった現実。それをあらかじめ表していただけのことで、そういうふうにして、福音書、あるいは新約聖書、旧約聖書を現在化してしまう。そして、黙示録のような将来に起こる事態をまた現在化する。いつも現在に生きる私たちに、過去と未来から迫ってきて、

「あなたは永遠の現在に生きるんだよ」

と、これが「終末的現在」を生きることである。第三巻『無の神学』にもありますように。そういう形で常に私たちと関わってくださっている。絶対界が相對界に、そして永遠界が現実界に、永遠がこの時間という我々の流れの中に切り込んでくる。無限がこの有限という我々の中に切り込んでくる。そういう驚くべき霊的現実の中に我々は生きている。

この現実を体感しつつ身読する者には、

もう一つ一つの言葉がにくいですよ、これは本当によく選ばれています。ゲーテは

「体感がすべてである」(Gefühl ist alles.)

という。そういうことを思いながら書いておられるんですよ。「身読」というのは日蓮が使った言葉でしょ。

「法華経を頭で読むやつは掃いて棄てるほどおる。心で読むやつは少ないけれども、やっぱりいる。しかし、お前は身で読め」

と日蓮は言ったという。だから、「体感」という一つの言葉の中にゲーテが入っているし、「身読」というところに日蓮がいるわけです。そういう深い背景からたった一つの言葉を先生は選んで書いている。

ですから、先生のこの時代の文章というのは、流し読みしたらダメなんです。一つ一つの言葉の中に目を見開いて、グッとその中に入り込むような気持ちで読まないと、先生と同一の境地で読めない。読書というものの本質はその著者と一つになることだと思ふ。著者がこの表現で何を訴えたいのか、著者は何を言おうとしているのか。それを本当に百分之百たり受けとつたらもう本当に本を読んだということになると思ふ。

聖書だってそうなんです。小池先生は、

「聖書は神の言葉のかけらである。聖書の奥からの響きを受けとれ。それはギリシア語でもヘブライ語でも何でも無い。神の根源語の響きを受けとれ」

と言う。神さまの中に入らなければ、受けとれないではないか。神さまと同じ次元に自分を置かなければ、そんなものは聞けないではないかと。そういうふうに思います。

この現実を体感しつつ身読する者には、聖書はつねに新しい神劇(オラトリオ)である。

神学的に言つたならば、イエスという神の人、即ち文字通り神霊の止ま^{とど}まっている霊止(人)の出現により、その啓示的実存により、霊的言動により、そこに新しい審判と救済の徴^{しるし}があらわれたのである。《

神さまは審きつつ救い給うんです。人間なら裁いたら裁き放しなんですけれども、神さま



の審きというのは必ずその奥に救いが輝いている。

「破れ」「砕け」について次に話しますけれども、人間の姿は破れている。破れているだけで、破れっ放しではどうにもならん。更にそれが自分の良心に突き刺さって、今度は砕ける。しかし、その砕けも中途半端だ。イエス・キリストが神さまの審きを受け、砕かれてくださった。本当の砕けがそこに成就した。その審きを通して神さまは生命へと、復活の生命へと大転換をなさしめ給う。だから、本当の救い、本当の生命がくる前には、その前にまずは全面的な否定がこないといけない。

「あなたのそのままの姿はダメなんだ。闇はダメだ。闇の中にとどまったらダメなんだ。闇を葬りなさい」

と。自分の、人間の闇は罪であり、罪という現実です。その価は死です。そういった暗闇、そういうものを本当に否定するというのが審判です。そこを通ったときに、もうその奥に救いの光が臨んでいるんです。

旧約では審判の面が強く出ていて、その救いの面が希薄です。だから、

「旧約聖書の神さまは恐い神さまだ」

ということになってしまう。

「二晩で二万五千人が審かれて死んでしまった」

というようなことが出てきたりすると、

「ああ恐ろしい神さまだ」

となるわけです。けれども、その背後には必ず救いがあるんです。それを露に表されたのがキリストです。しかもキリストという方は、「あわれみか、いけにえか」というところにでてくるけれども、犠牲は自分が引きとって、憐れみの方だけを我々に下さった。審判そのものをキリストは引き受けて、救いだけを下さるという、本当にこれはもう言葉でいえない愛の現実を我々に下さったんです。四福音書というものはそういうものだ。そのことは、

「人間の自主自律の事態には躰ぎのあらしである」

ことを意味します。

私が大学に務めていた当時を顧みますと、非常に学生運動の盛んな時で、しかも大学紛争といわれるように、既存の秩序とか組織とかいう既存のものに対する、いわば破壊の時代だった。学生たちが直感した何か、魂のうずき、それを大学破壊という行動で表した。そうした運動や破壊に、ある意味で同調する知識人もたくさんいたわけです。そういう考えや行動に流れているのは全部、人間中心です。人間の人間による人間の革命なんです。

「神さまなんてとんでもない。そんなものは阿片だ。我々は理性を信じる」

と言って、ゲバ(ゲバルト Gewalt 威力、暴力)で破壊をしている。

「これは建設のためである」



と、こうくるわけです。革命だって、^{しゅくけい}粛清する、邪魔者はどんどん粛清する。何千万人と殺す。でも、

「新しい理想の国を造るためだ」

とか、そういうことになる。すべてそうした考え方に流れているものは全部、人間万能主義、理性万能であって、人間は自由であって、束縛しているものを全部ぶっ壊して、自律的な人間として自分ですべてを決めていくという自己決定、自主自律です。しかし、

「その人間の主体そのものの奥に巣くつている罪と死という、この根源的な闇に気付かないのか」

というのが福音からの語りかけなんです。でも、あの運動とか、そういう思想というのは、その罪とか死という問題だけは除けている。それを除けたところで、理性的人間が理性的に営みをやっていくという、そういう閉ざされた世界の中で人間の最高の自律性を発揮しようという、そういう運動だと私は思う。だから、そういう人たちにとっては、

「悔い改めて福音を信ぜよ」

とか、理性を超えた次元のことを正面から突きつけられたら、これはもう躓きである。

「神は人となつて現れたなんて、とんでもない」

と、ギリシア人も(パウロに)言うわけです。

「もし神が神ならば、永遠にどこか人間の捉^{つか}まえどころのない所にいらつしやるのが神であつて、人の姿をとつて現れるなんて、そんなバカなことがあるものか」

と、こうなるわけです。

《それは、人間の自主自律の事態には躓^{つまず}きのあらしであり、

これは今もそうですよ。躓きなんです、福音は。ところが、福音や神の存在は、

極限状況にある人間には驚きの恵みであつた。

これは破れた姿の人間には、ということ。あとで、「破れ」「砕け」と続いていきますけれども。別な言い方をしますと、どういう人たちが福音に躓き、どういう人たちが福音を受け入れたか。前にありますような、自主自律の理性的な存在で、しかもそれをすべてとして誇る人にとっては躓きである。しかし、

「自分なんかどうしようありません、どうにもならない私を何とかしてください」

と叫びかかってくる人。それが病気であろうと、身体の問題であろうと、精神の問題であろうと、道徳の問題であろうと、宗教の問題であろうと、何であろうと、

「自分はもうこれではどうにもなりません」

という極限的な状況にある人は、イエスによって驚くべき恵みの中に入れられていく。その両極端ですね。

しかもこの福音は歴史の終末に至るまで、いかなる時代にも、そしてこの危機的な二十世紀の今日にこそ、最も深く関わるおとずれである。



キリストの本願は、我々の意志にコペルニクスの転回をもたらし、「我々の意志」は、人間中心、自己中心ということでありますから、そういう我意というものを引っくり返してしまいます。

理知の中心に靈知を与え、情感の奥に靈感を湧きたたせ、身魂に大生命を与えないではやまないものである。

私がさつき申しました理知、その中心の位置には実は靈知という、もうひとつ深い根源的なものを植えてくださる。そうすると、今まで理知と靈知が対立するかに見えていたのが、実は靈知が理知を活かしていることがわかる。これなんです。別な言葉でいえば、文化文明というものと宗教の世界、これが相反するかに見える。ところが実は、本当の深い宗教性が本当の健全な文化文明を育むという――先生のあの樹木の構造です――それがここで暗示されているわけです。

理知の中心に靈知を与え、情感の奥に靈感を湧きたたせる。

「情感」というのは、ハートの世界、あるいは芸術を成り立たせている世界です。生まれながらの人間の豊かなハート、感受性、そんなもので芸術の領域は多分かなりのところまで行けるんでしょうけれども、

「その奥にもう一つ靈感というものがあればもっと凄いものになるよ」

と、先生がいつも仰いますね。レンブラントの芸術なんかそうだと。ヨーロッパの凄い芸術というのはみなその靈感というのが根底にあつて、そこから展開しているから凄いんだ、向こうの文学だってそうなんだという。

身魂に大生命を与えないではやまないものである。

「身魂」、これは人間の生まの(生まれたままの)姿ですよ。人間には身体があり靈魂があります。

「靈魂がある」

というだけではどうにもなりません、その靈魂に本当の神の霊が宿って生命をいただかないと。単なる靈魂なら、いくら靈魂が不滅であっても、その靈魂が闇の中をさまざまに迷っていたら、その靈魂不滅もこれは地獄ですよ。その靈魂の中に神の生命が宿らなければ、靈魂は光らない。光に点じない。ですから、この『無者キリスト』の中の総序の、この始めのわずか2頁ほどのところですけども、キリストとその福音の根本性格と構造を端的に総括しており、実に心憎いほどの表現であると思えます。

このような福音書を中心として自由に取材し、キリストとその福音の根本性格と構造を次の三部曲をもって浮き彫りにしたいと思う。

第一部 キリストの実存十転

キリストの啓示の事態を、十転の転機を枢要としてとらえた。すなわち、キリスト・イエスの受肉(降誕)、受洗、靈戦、伝道、変貌、十字架、復活、昇天、靈降、再臨。



これはキリストが天界から地上においてこられ、そして地上で伝道された。最後に十字架、復活、昇天、そして天から聖霊を降くだされるという、キリストを中心にした事態をずっと十の転機で捉とらえていこうというわけです。これが第一部です。つまり、キリストに焦点を当てて、キリストの側から捉えている。

第二部は人間の側からキリストを捉える。しかもそのキリストは我々に恵みをもって迫ってこられます。そういうキリストという神さまの恵みを前にして、いたい人間とはいかなるものか。人間というのはどのようにしてキリストに導かれ、どのような姿に最後はなっていくのだろうかという、人間の方に光を当てたのがこの第二部です。

第二部 人間の福音的実存七相

福音の光に照破しやうはされるときの人間の劇的な七相はこうであろう。すなわち、破れ、砕け、突破・突入、内住・常燃、担い・抱き、棄身・棄石、本願・栄光。私はまず、この第二部から読み始めようと思つています。ですから、ここでの説明はこの程度にします。

それから第三部は「無的実存」。このキリストの側と人間の側、その二つを統合する形で、いわば福音というものの構造、あるいはキリストというお方、それを神学的に捉えていこうとするのがこの第三部です。

第三部 無的実存

無的実存とは何を意味するか。キリストをなぜ無者というかをあきらかにする。そして、まことの宗教が文化、文明とどのように関わるかを、また宗教と教育の問題を考えてみる。》

と。こういうわけです。

●第二部 人間の福音的実存七相 まえがき

そこで、第二部の「まえがき」のところへ移っていきたいと思います。155頁です。ここに第二部の全体像が描かれております。

《第二部 人間の福音的実存七相

まえがき

キリストほど人間を知っている人はいない。それはイエスが深い思い遣りをもっていた人であり、霊的洞察力が桁けたちがいの人であつたからである。キリストの「よろこびのおとずれ」すなわち福音とは、キリストがどのように人間を知り、どのように人間を愛したか、という関わりの事態である。

それを私は次の七相においてとらえた。第一相は、「破れ」である。精神的にも肉体的にも「破れ」が人間の内的な実相ではないか。イエスはそれを深い思い遣りで知っていた。人間は一応整つてはいる。だが深層は「破れ」ている。それを哲学や教育



法律や政治、経済や医学等々で修養、錬磨、改造、改変を試みるのであるが、「破れ」そのものは人類の歴史と共にだんだん深刻になるようだ。それが人類の惨憺たる歴史ではないか。キリストの福音は、この破れた古い皮袋かわぶくろを無縫むほうの「新しい皮袋」に変質させる力をもっている(マルコ2・22参照)。デルフィ神殿の「己れ自身を知れ」とはまずこの「破れ」を自覚することではないか。

第二相は「砕け」である。「破れ」を破れていないと思ったり、言い張るところに、人間の自己弁護、自己義認という我執的な偽善的なすがたが出てくる。そのような心が砕けないかぎり、まことの人間性が生きてこない。どうにも「つぐない方ない」(ルカ7・42) 破れを自覚するところに、神に対する「砕け」の心が出てくる。自己否定、自己嫌悪が本当になると「砕け」たる魂となる。これが救いへの関門である。

さらに心をひそめてみると、はたして人間は手ばなしで徹底的に砕けきれぬだろうか。ところが心魂の砕けをイエスはもっていた。我々の心が砕け切れないところに我々の罪がある。この罪のため、イエスは十字架の「砕け」をもつて決定的に罪びとをあがないとった。それが旧約のイザヤ書第53章で預言されている事態である。曰く、

「彼こそはわれらの罪のために傷つけられ、われらの不義のために砕かれ、自らこらしめを受けてわれらに平安やすきを与う」(イザヤ53・5)

これがあのゴルゴタの丘にある十字架で自分を決定的に砕いて、贖罪しよぐざいを果したイエスの「砕け」である。この十字架の「砕け」を信受して、決定的な「砕け」の魂を賜たまわるわけである(詩51・17)。

図式的にいきますと、今、人間が高度100メートル位の所に居るとします。そこからだんだん落ち込んでいく。

「ああ、私の姿は何たる破れだ、私はどうにもならん」

と、だんだん「破れ」て、下へ下へとくだって行く。最後に「砕け」というのが一番底です。どん底で本当の砕けをいただくと、今度は、そこに第三相の「突破・突入」の事態があらわれ、神さまの聖霊が臨んできます。そこでガラツと死から生命へ、闇から光へと変えられて、今度はグングン上昇して行く。そのことがキリストの「復活」に表れています。神さまの聖霊は凄い生命力ですから、それによって我々自身もキリストの復活と同じようにどんどん昇っていく。始め高度100メートル位の所に居たのが、もう100メートルどころか無限無量までどんどん昇っていく。

だから、先生はよく放物線を描かれました。普通の理性的な人間の生き方は、上向きのこういう放物線(頂点が上の放物線)だと。ボールを投げますね、必ず落ちます。ボールを投げて天まで行くボールなんてない。必ず落ちてきます、重力で。ところが、神さまが我々に下さる放物線は、つまり神さまに出会って、キリストによって救われる人間の放物線はまず落ちていくんです(頂点が下の放物線)。



「どこまで行くんだろうか私は。どこまで落ちればいいだろうか」
「どん底までだよ」

どん底まで落ちた放物線は、今度は上がっていく。それは限りなく上にあがっていく。
「普通の上へのぼっていく放物線はダメだ、下においていく放物線でなければダメだよ」
と、先生はよく黒板に書かれました。破れから碎けへ。碎けた所にこの第三相がある。
《第三相は「突破・突入」という事態である。十字架の碎けを賜わって、罪なる自我から解放された無私、無我の根源現実！ 自我から解放された自由のよろこび！ しかしそこには何か積極面が欠けてはいないか。

単なる解放だったらまだ足りない。

生きたい人間の根元衝動を新たに受けとめてくれる本願の事態がないものだろうか。果然、霊界からわが中に突破突入してくるものがある。それが、聖霊の「突破・突入」で、前者と不可分の啓示的絶対恩恵の事態である。キリスト信仰の中核は、まさにこの「碎け」と「突破・突入」の二相一貫に在る。

このことは十字架(碎け)と聖霊(突破・突入)が不可分であるとも言える。「十字架・聖霊」が一如の事態がここにある。

永遠的霊性をもって自現した復活のキリストの霊生が現実になが生命となってくる。これが無的実存の根源相である。福音はこれだ、といって証者となったのが、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロらの使徒たちであった。

聖霊がこのどうにもならぬ我を突破し、突入することによって、すなわちみ霊(たま)のバプテスマによって、神霊の止まる霊止(とど)たる本然(ほんぜん)の人間性を得ることになる。知・情・意がその人らしいバランスにおいて有機体的関連性を得ることになる。そして一切のイデオロギーを越えた次元に、人間本然の生き方の根源があることを体得できるようになってくる。

それからの生き方というのが第四相の事態である。これがまた大事なんです。突破・突入は聖霊のバプテスマでももの凄く燃える時です。異言が迸り出たりとか、もの凄く燃える時です。ところが、燃えたあと静かに燃え続けていく。これが大事です。静かに燃え続けていく。パツと燃えるのは花火みたいなものです。けれども、そのあと静かに燃え続けていく。聖霊が愛の火となって、常燃の火となって燃え続けていく。これがとても大事だと。

第四相は「内住・常燃」である。すなわち突破し突入して来た天来の聖霊が深く内に住まい、しずかに常燃している事態である。そのためには、三度の食事をするように、つねに聖書を祈り心をもって読み、血となし肉とすることによって聖霊を内住せしめ、常燃せしめるのである。聖言(みことば)は聖霊の肉であり、祈りは聖霊の血である。

聖言と祈り、聖言を支えとした祈り。常にそれがなされていると、その聖霊の内住・常燃



という事態が展開していく。それを別の面からいいますと、聖霊が内住し常燃している人の姿は必ず、人を担い上げる、人を愛して救いあげる姿になることを意味します。それが第五相です。だから、この第五相は第四相を別の面から見ているだけです。内住・常燃がしばらく続いて、それから担って行くのではない。内住・常燃と共に、もう聖霊が宿つて絶えず内住し常燃してくださるという人の姿は愛の姿たらざるを得ない。担いの姿にならざるを得ない。それが第五相です。

第五相は「担い・抱き」である。このみ霊の力、キリストの霊性が、上述のごとく実存の底力となり、内住し、常燃することによって、おのずから隣人をこの力で、この生命で「担い」、「抱く」という愛のはたらきとなってくる。「敵を愛する」とは、このような「担い」で敵を担い、救いあげることである。また、さまざまの異分子を大きく抱いてしまふ、包んでしまふ。一切を包摂し、担いゆく本願力に通ずる消息が次第に体现されてゆく。

一足飛びにはいかないでしょうけれども、段々それがその人の本性になってくる。別に努力しているわけでも何でもない。そうせざるを得ないという、もう先からだが動いてしまふ、そういう姿になっていく。

「愛はすべての罪を掩つ」(箴言10・12)とはこのことである。

それから、第六相と第七相は殉教の姿です。パウロも殉教し、ペテロも殉教しました。みんな殉教しました。そのように本当に十字架を担っている者、本当に聖霊の愛に生き抜く者は必ずどこかで倒れる。でも、倒れつ放しではない。必ずキリストは栄光をもって抱きとってください。これが第六相と第七相です。

第六相は福音の終末的段階である。それは即ち「棄身・棄石」といった表現であらわしたい事態で、担いながら、抱きながら、この相対的存在たる現実の我らの実存の相としては、ついに仆れる事態で、

一粒の麦となって地に落ちる。

自らは献身、棄身の態勢、キリスト道に殉じる質のものである。世の人々からはのけ者にされ、然り、むしろ同類のキリスト者という人たちに誤解され、躓かれ、異端視され、棄てられ、――古来改革的先駆者たちはそういう運命を担わされた――謂わば棄てられた石となる。キリストが「おのが十字架を負え」といったのはこのことである。しかし、どうあつかわれても、聖霊の内住が本ものであるなら、常燃の火となってい

るならば、微笑みつつ耐えてゆく。

歯を食いしばって耐えるなんてことはしないんです、キリスト者は。私は、小池先生が歯を食いしばって耐えている姿は見たことがない。ションボリしておられる姿は見たことがあるけれども(笑)。歯を食いしばって耐えるなんて、先生には向かないですよ。本当にそういう姿でしたね。微笑みつつ耐えていく。だから、よく言われたですね、



「女性が本当に逆境の中にありながら、微笑みを失わない、そういう姿は実に素晴らしい天国の姿だ」

と、よく言っておられた。

本当の愛は死よりも強いからである。このようにして棄石となつた実存者こそ神の歴史のどん底を担う「隅の首石」となる。

そういう、キリスト道に殉じる、棄身棄石で仆れた人を神さまは放っておかない。もう抱きかかえて天国へ連れて行つて、キリストの御許へと連れて行つてくださる。キリストご自身が迎えに来てくださることもあります。

第七相は「栄光」である。福音的実存のたましいは神の国到来を悲願として、終末的希望に生きている。「聖国を来らせ給え」という祈りが呼吸となつている。「われ速かに到らん」とのキリストの本願の言は、二千年前よりも歴史と共に質的に濃度を増した聖言としてひびく。この本願が究極のところで成就することを確信している。このような存在は神の栄光体と化せられてゆく。

全福音書は、渾然としてこの七相から成つていって可いであろう。それはあたかもキリストの白光に映えて七彩の光を放つ虹の如く美しい人間の本然の相である。……そして「栄光より栄光に進み、各自の相をもちながら、主のみ霊にあつて主と同じ像に化する」(コリント後3・18)ことが約束されている。》

●第一相 破れ「姦淫の女」(ヨハネ7・53〜8・11)

人間の福音的実存七相の「まえがき」で全体を押さえた上で、次に第一相の「破れ」のところを見てみたいと思います。まず、ヨハネ伝7章を開いていただきます。7章の53節から8章にかけて、学説によるとこれは本来、ヨハネ伝のここにあるのではなくて、ルカ伝のもつと後ろの方にあるべきだったということが書かれています。

「53 斯くておのおの己が家に帰れり。」

1 イエス、オリブ山にゆき給う。2 夜明ごろ、また宮に入りしに、民みな御許に來りたれば、坐して教え給う。3 ここに学者・パリサイ人ら、姦淫のとき捕えられたる女を連れきたり、真中に立ててイエスに言う、4 『師よ、この女は姦淫のおり、そのまま捕えられたるなり。5 モーセは律法に、かかる者を石にて撃つべき事を我らに命じたるが、汝は如何に言うか』6 かく云えるは、イエスを試みて、訴うる種を得んとてなり。イエス身を屈め、指にて地に物書き給う。7 かれら問いて止まざれば、イエス身を起して『なんじらの中、罪なき者まず石を擲て』と言ひ、8 また身を屈めて地に物書きたもう。9 彼等これを聞きて良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人一人いでゆき、唯イエスと中に立てる女とのみ遺れり。10 イエス身を起して、女のほかに誰も居らぬを見て言ひ給う『おんなよ、汝



を訴えたる者どもは何処におるぞ、汝を罪する者なきか』11女いう『主よ、誰もなし』イエス言い給う『われも汝を罪せじ、往け、この後ふたたび罪を犯すな』(ヨハネ7・53〜8・11)

見出しに「いけにえかあわれみか」とあります。これは名文ですので、ちよつと読ませていただきます。

●いけにえかあわれみか

《弟子たちが、多くの取税人と、律法に無知な庶民でアム・ハーアーレツ「土民」といわれているいわゆる「罪びと」たちと共に食事をしている(マタイ9・10〜13)。

よく聖書に「罪びと」と出てきます。これは何も犯罪人だとか罪を犯した人というのではなくて、およそ律法を知らない無知なる人たちのことを言います。「律法」というのは神のおきてでした。それを全然知りもせず、読むこともできない、そういう無知蒙昧なやからというのを「罪びと」と蔑んで言った。およそ救いには縁遠い、縁なき衆生という言い方です。そういう人たちのところへキリストは好んで入って行かれた。

例のごとくモーセ律法厳守をもって自ら任じ、然らざる人々を見下し、自分たちを義人として「区別」していた律法主義者たる「パリサイ人」たちがそこへやって来て、

「パリサイ」という用語は、二つに「区別」する、「分かつ」ということを意味する言葉です。「パリサイ」の根源はレビ記あたりにあると思うけれども、レビ記では「潔い動物」と「潔くない動物」という使い方をしています。

「潔くない動物、汚れた動物には一切触れてはならない」

という表現があります。だから、ユダヤ人というのは汚れたものに触ったら、いちいち手を洗うとか、とにかく潔いものと潔くないものとを絶えず区別していく。もちろん、自分は潔いところに身を置く。潔くないものには触らず、距離をおく。だから、人間でも、罪びとというのは潔くない者として区別する。自分たちは「パリサイ」、区別されて潔い者として区別される。神さまがレビ記で「潔い動物、潔くない動物」と区別したことが非常に躓きになっていると思う。動物に何の罪もないのに、それが

「あなたは汚れている、あなたはよろしい」

と、こう区別されているんですから。

使徒行伝10章に書かれているように、ペテロが12時の祈りを屋上でしている時に、空腹の中でフラフラしてきたところ、パツと天が開けて、天上から大きな布が下りてきて、そこにあらゆる獣がいて、いわゆる汚れた動物が一杯いたわけです。神さまはペテロに、

「それを屠って食べろ」

と言った。ペテロは、

「主よ、とんでもないことです。私はこんな汚れた動物には触ったことがあります



んし、食べたことはありません」

と言った。その布の入れものはスーツと上へあがつていくと、しばらくしてまた下りてきて同じことが三回あった。

「神が潔めたものを、潔くないなんて言うな」

というのが神さまのお示しだったわけです。ところが、ペテロは律法に凝り固まっていますから。いくらイエスの弟子だといっても、律法に凝り固まっています。そしたら、玄関に訪れて来た人があった。百人隊長コルネリオからの使いの人たちで、異邦人です。

「異邦人とは交わるな」

というのがパリサイで区別されていました。ところが、その使者は

「ヨッパのシモンの家に滞在しているペテロを呼んで来い」

という神さまのお示しがあったので、コルネリオから遣わされて迎えに来たわけです。

「実はかくしかじかで、私は参りました。どうぞ、先生、来てください。私がお供いたします」

と言う。ペテロは、

「ああ、今日は実はお昼時に不思議なことがあった。これはきつと今までは、異邦人とは交わるなと厳しく線が引かれていたのを、その線を神さま自らがぶっ壊して、『神が潔めたものを潔くないと言うな』ということを仰ったんだ」

と思つて、招きにあずかって出かけた。そしてコルネリオの所へ行つて、しゃべっているうちに聖霊が降つてきた。

「あつ、異邦人が聖霊を受けた！」

と、びつくりしたわけです。その後、ペテロが自分たちの仲間のところへ帰ると、

「お前は異邦人と一緒に食事をした。お前はけしからんことをやった」

と、おおいに非難された。それでペテロは一生懸命弁明するわけですよ、長々と。それが使徒行伝10章の所に出できます。そのくらいに、律法とか旧約聖書は、当時の信仰深い人たちにとって金科玉条のもので、法律以上に厳しいわけです。ところが、イエスさまの方は手も洗わないし、罪びとや取税人や遊女という人たちの所へ入りこんでいる。結構、一緒に食事もし上がったようだし、お酒も飲んでおられた。

「大酒飲みの大飯食らい」

と言われたとある。そういうふうにして、とにかく、今まで律法に凝り固まっていた人たちの、固定観念を次々、壊していかれた。安息日もまた然りですね。

「安息日は一切何もしはならない」

と律法に定められていたら、それこそ何もしないんです。誰かが井戸に落ちて溺れていても、池に落ちて溺れていても、安息日だから助けてはいけないということになる。

「そんなことで、お前たちはいいのか!？」



と言って、イエスは突きつけられた。ですから、ここもその一つの例にすぎません。

「パリサイ人^{びと}」たちがそこへやって来て、弟子たちに、「きみたちの先生は、なぜ取税人や罪びとたちと食事を一緒にするのか」と刺^{とげ}をふくんだ問いを發した。それに応答したのはイエス自らであった。「健康者には、医者是要らない。ただ病人だけが医者を要する。おまえたち、往つて学ぶがいい、『我れあわれみを好みて、いけにえを好まず』(ホセア6・6)とはどういう意味か。私は正しい者を招^{まね}ぐとしてゐるのではない。罪びとを招^{まね}ぐために来たのだ」(私訳、傍点訳者)。

福音書をみると、いつも対立しているのは、取税人、遊女、罪びと、不具者、精神病患者などと教法師、祭司、パリサイ人^{びと}たちである。そしてキリストはつねに前者たちの味方になっている。ここにイエスの福音が「躓^{つまず}きの石」であるすがたがある。精神的欠陥者と肉体的欠陥者を救わんとて、イエスは来たのであつて、宗教家、道德家、学者、健康者は彼に関わりなき者であつた。》

先生はこんなことも言われた。テモテ第一の手紙というのがあります。1章15節に、

「『キリスト・イエス罪人を救はん為に世に來り給えり』とは、信^{まこと}ずべく正しく受^うくべき言なり、其の罪人^{つみびと}の中にて我は首^{かしら}なり。」

ここを引かれた時に先生はこう言われた。

「キリストはね、罪びとにしか用はねえんだよ。罪びと以外の人間には用がねえんだよ」

と言われた。パウロは、

「罪びとの中で私はかしらだ」

と言つた。内村鑑三も、

「自分が救われるなら、どんな人も救われる」

と言つた。小池先生も、

「自分は罪びとのかしらだ」

とよく言われた。

「ところが実は、キリストご自身が罪びとのかしらになってくださったんだよ」

と、そうも言われました。その

「キリストは罪びと以外には用がねえんだよ」

という、そのベランメエ調の言い方が非常に私の耳に残っているんですよ。

「罪びと以外に用がねえんだよ」

と、これは本当に味わい深い言葉です。

それでは『無者キリスト』の方へ戻りますが、161頁の先程のところでは

《しかし、誰が精神的にまた肉体的に本当に健康者であるのか。パリサイ人中のパリサイ人であつたパウロは復活のキリストにダマスコ途上で靈撃されたあとで、「義人は



いない、ひとりもない。「自分こそ罪びとの首である。」と告白するに至った。いかなる健康者も死病には勝てない。

せいぜい百歳ちょっとで我々人間の肉体は終わる。どんな健康者も死の病には勝てない。イエスは、自らを義としている連中に「わざわいなるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ」とたたみかけて大喝した(マタイ伝第23章)。

あわれみかいにえか、というイエスの言は、きわめて重要である。預言者ホセアを通して啓示された上掲の言は、まことの宗教の何であるかをずばりと宜したものである。祭儀をこととするユダヤ教的祭司宗教、誠律宗教に対する根本的批判である。預言者の宗教のハートを示した言である。しかもイエスは自らいけにえとなつて(十字架、祭儀と律法にとどめをさした。道はあわれみ(愛)の一途たる福音にあることを体現した。議論ではない。全存在をもつて誰がこのような解決をなし得るか。いけにえではない、あわれみである、と宣したイエスは、全く逆説的に、自らいけにえとなつて、あわれみの極致を体現した。これがあがない(贖罪)のあわれみである。イザヤ書第53章の体現である。

身体障害者をことごとく癒し、死人をもよみがえらせ、いかなる精神病者をもなおし、罪びとを無条件にゆるす、おどろくべき実力あるあわれみのイエスに驚嘆し、平伏すほかに我々のすがたがあるだろうか。

義しいとか、潔いとか、立派だとか、相対的な人間の価値をあがないぬきに問題にしている人たちと、私は本質的には関わりがない。キリストにあがなわれた私は、あがないを必要としない人たちとは本質的には関わりがない。》

この文章に触れた時に私は本当に身震いした——大げさに言いますならば——この文章を先生がずっと読み上げられた時に。

その頃、先生はある試練の中におられた。まあある意味では身から出た錆といった面もあったんですけども、集会員や召団の人から非常に烈しく非難された。先生から離れて行った人がたくさんいた。集会内に或る種の分裂が起きました。集会だけではない。召団内にも起きました。

「もう、先生にはついていけない」

「いや、やっぱり私はついていく」

とか、そうした試練のある中でこの集会が開かれていた時なんです。その中でこれを宣言されたんですね。

「義しいとか、潔いとか、立派だとか、相対的な人間の価値をあがないぬきに問題にしている人たちと、私は本質的には関わりがない。」

しかも、相対的な人間の価値それ自体を手放して主張するんですね。あがないぬきで、つまり、贖われた罪びとというその角度がなくて、ただ



「あの人は立派だ、あの人は立派でない。あの人は罪びとだ、あの人はダメだ」とか、そういうふうには十字架ぬきでいろいろ議論している人と私は本質的に関わりない。どんなに立派な人であっても、私はそういう人とは関わりがないと。さきほど述べた、「キリストが用があるのは罪びとだけなんだ。罪びと以外には用がねえんだよ」と。それと同じです。それを裏返しに言ったのがこれですね。そういう相対的な人間の価値、それを贖い抜きにそれ自体を、ある意味では絶対化している、そういう人たちとは私は本質的には関わりがないと。

「キリストにあがなわれた私は、あがないを必要としない人たちとは本質的には関わりがない。」

と。だから、先生がいろいろ叩かれて批判された時に、

「十字架の下で握手したい」

と言われた。

「どんな私の罪も十字架で根源的に赦されている。私は赦された罪びとだ。大慈悲心をたまわった」

ということも言われた。

「そういう十字架に平伏している私をなおも君たちは鞭打つのか」

という言葉で表してもいいと思う。

「罪なき者、まず石を投げ打て」

というのがこのあとに出てきますけれども。

「あなたがたに審く資格があるのか。あなたがたも程度の差こそあれ、同じ罪びとではないか。自分の破れに気がつき、砕け、キリストの砕けを賜って、徹底的に十字架のもとで砕かれ、平伏している、そういう人間をキリストは無条件に抱き給う。無条件に赦し、無条件に抱き給う。七度の七十倍でもそうしてくださる。なのに、そういう人間小池に愛想をつかして、審いて去って行く人は、仕方がありません」

と、まあそういうことですね。この集会への参加をずっと貫いて来られた方はみんな、そういう先生の姿に、

「やっぱり私は先生を信じてついていく」

という気持ちの方々ばかりがそのあと残っていらつしやるんですけれども。人間的なレベルでいえば、辛いところでしょうね。赦せないかもしれないですね。しかし、先生は

「十字架の下で握手しよう。十字架の所で出会おうよ」

と、そういうふうには呼びかけておられた。人間的な情としては、

「もう仏の顔も三度まで。もう嫌です」

と言って去っていくことになっても、私は去った人を責めることはできません。そういう



意味で、福音というのはギリギリのところなんです。

「キリストにあがなわれた私は、あがないを必要としない人たちとは本質的には関わりがない。」

と。いや、みんな贖いが必要とすることは、自覚はしているんだけど、その受けとる深さの問題なんです。クリスチャンはみんな贖いを受けとった人間なんですけれども、そうでありながら、不徹底なんですよね。やつぱり人の目にある塵^{ちり}が気になって、自分の目に梁木^{うづばり}があるのに気がつかないという、どうしても自己義認の角度になってしまふ。義^{ただ}しい人ほどそうなるんです。清らかな人ほどそうなるてしまふ。そこが難しいところですよ。

《我れ汝の足を洗わずば、我れ汝と何の関わりあらん》と言ったイエスに「足を洗って」
いただかなければ——罪をあがなっていたいただかなければ——どうにもならぬ私であるからである。》

先ず背景として、当時律法が厳守されていたこと、それを打ち破って、イエスが本当のあわれみ、愛で人々を救いあげたことを述べましたが、少し飛ばしまして、「捕われた女」の具体的な様子やイエスの対応を詳しく見てみたいと思います。

●捕われた女

《さてこのヨハネ7・53〜8・11は、本来この箇所にあるべきものではなく、ルカ21章の終りに来るべきものであると学問的には言われている。つまりイエスがエルサレム入城をする前、いよいよ最後の晩餐^{ばんさん}を迎える少し前の話である。

ルカ伝21章の一番お終いのところです。

「³⁷イエス昼は宮にて教え、夜は出でてオリブ^いという山に宿り給う。³⁸民はみな

御教^{みおしえ}を聴かんとて、朝とく宮にゆき、御許^{みもと}に集まれり。」(ルカ21・37〜38)

もうこれは最後の段階ですね。昼はお宮^{みや}さんで教えて、夜はオリブ山で夜を過ごされた。また朝になると、宮におりてきて、そこで民に教えを説いておられたという場面です。もう一度、『無者キリスト』に戻りますと、以下のように書かれています。

「イエス、オリブ山にゆき給う」とは山で全霊をうちこんで祈らんがためであった。イエスは夜もすがら祈り明かして、夜明けごろ宮に入つてみ霊^{たま}に満たされて語っていた。

すると、教法師やパリサイ人^{ひつ}らが姦淫^{かんいん}の現行犯の女を伴^つれてきて、衆目環視^{しゅうもくかんし}のただ中に立たせて、「先生、この女は姦淫の時、そのまま捕えられたのです。モーセは、こういう者は石で打ち殺されるべきであると我らに命じていますが、あなたはどうか言われますか」と問うた。姦淫罪にはいろいろな場合があることは、申命記22章、レビ記20章に記されてあるが、大方の場合石で打ち殺されることになるので、彼らの言う通りなのである。



もしイエスがこれを許せば、モーセの律法に触れて、宗教会議にひき出され、訴えられることになる。またもし「殺せ」といえば、ローマ法に触れて殺人の煽動者にされる。

殺せと言って石打ちにしますと、殺人罪になる。宗教的理由にせよ、人を殺すということは許されなかった。ローマの支配下におきまして。だから、彼らはイエスを十字架に付けるのも、ローマ総督ピラトの許しを得てやったわけですね。

どちらにしてもイエスは捕えられることになる。そこに質問者どもがイエスを陥れるおとしあな 罀があつた。そのような悪たくみを看破したイエスは、第三の答えをもって彼らの意表に出たのである。》

●地にも書くイエス

《それは「身を屈め、指で地面にも書く」という行為であつて、「姦淫の女をつれてきた人々と」同次元に立つての言葉の答えではなかった。

このようなイエスの動作「が記されている」は聖書にここだけである。きわめて印象的な一場面である。学者もパリサイ人も、物見高い群衆も、イエスのこの行為に瞠目し、何を地面に書くのかと覗き見をしたにちがいない。衆目環視のただ中で地面に書いていたイエスの文字は何であつたか。永遠の謎である。

沈黙のイエス、もの書くイエス。イエスは答えに窮してこんなことをしているのだろつ、そつ思つた「彼らは、問いつめてやまなかつた」。あまりに推し迫つてくるので、イエスはおもむろにからだをもたげて、鋭くもまた深いまなざしで、「おまえたちのうち、罪のない者(アナマルテートス、聖書にここだけの語)がまず石を擲て!」。この一言は、モーセの律法を楯としている彼らに対して、律法以上の靈法を矛として立ち向い、彼らの楯を突き破る一言であつた。善きにつけ悪しきにつけ、人の心腸を深く透視する靈能はイエスにおのずから備わっている。彼は全く私心がなくからである。レントゲン線は病患を透視するが、イエス線は心患を透視しつつ救いあげてゆく。

「すべて色情をいだいて女を見る者は、既に心のうちに姦淫をしたのである」(マタイ5・28)と彼はいったことがある。であるから、モーセの十誡の第七項「汝姦淫するなかれ」をキリストの光でよむと「姦淫」とは、よこしまな肉情の行為以前の心情の内的衝動に関わることとなる。この場合この女ばかりが現行犯として捕えられたが、相手の男はどこにいるのか。イエスには、既にその点も見えていたにちがいない。

「律法は聖なるものである」とパウロが言つたのは、イエスの内的な律法の情報にかかわる消息である。このような律法を内的に充たし、成就できる人はイエスの他にはいない。モーセの十誡は、どれもこれもそのように内的にもつと文字の奥を受けとるべきものであることは、イエスの「山上の垂訓」がこれを語っている。「山上の垂訓」



は十誠を超える靈言^{れいげん}なのである。》

● 去りゆく偽善者たち

《イエスの権威ある言と、深い鋭い眼差^{まなざ}しは、今やこの女を石打ちにしようとして身構えていた偽善者たちの肺腑^{はいふ}を貫いた。彼らの手の石がにぶい音をたてて地面に落ちた。傲慢な、冷酷な、悪意を孕^{はら}んだ、無慈悲な偽善者たちこそ、自分の心を自分の石でうたれたというものである。一人また一人と環^わを崩してそこを去っていった。『義人はいない、一人もいない』とパウロが言った通りである。破れのこの女を責めた連中こそ、実はもつとひどい破れをごまかしていた偽善者たちであった。『彼らはこれを聞いて良心に責められ、老人をはじめ若い者まで、一人また一人と出て

ゆき、唯イエスと中に立っている女とだけが残った』と、その光景をまざまざと伝えている。そのイエスはしかし、彼らの去りゆく姿すら見てはいない。

私だったら、『ざまあみろ!』と言いたいところなんですけれども、そうも言わない。

彼はその間すでに「また身を屈めて地にも書いていた」。何という人であろう。権威をもって彼らに鋭い言を発した彼は、次の瞬間には眼をそらして地面に何か書いているのである。何の必要があつて、何を書いているのであろう。

「おまえたち、人を審^さくな。おまえたちも審かれるぞ。自分が審く審判^{さはん}で自分もさばかれるぞ。なぜはらからの目にある塵^{ちり}を見て、自分の目にある梁木^{りやうぼく}を認めないか。偽善者よ!」(マタイ7・1-5)とでも書いたのか。それとも「女を見て色情を抱く者は……」(マタイ5・28)の句を書いていたのか。あるいは未だ聖書につたえられていない何か別な言^{ことば}を書いていたのか。それとも異言的な文字をつづっていたのか。そんな詮索^{せんさく}はこの場合どうでもいいようだ。

イエスのところは、人の弱さに対する深いあわれみであるようだ。一面教法師(律法学者)やパリサイ人ら(宗教や道徳の実践自任者)の偽善に対しては鋭く叱咤^{しつた}しつつも、他面彼らの人間としての弱さをあわれんでイエスは目をそらした。》

● 私もおまえを罪^{つみ}しない

《イエスはあたりがしずかになったので、身を起こした。その女のほか誰の影も形もない。『女よ、おまえを訴えた者どもは何処^{どこ}にいるかね。おまえを罪^{つみ}する者はいないか。』女は答えた、「主様、誰もおりません。』するとイエスは言った、「私もおまえを罪^{つみ}しない。往きなさい。もう二度と罪を犯しなさんな。』私もおまえを罪^{つみ}しない。』イエスのこの言葉は、それより七百余年前に姦淫^{かんいん}の妻をもった預言者ホセアの言葉のひびきと相通う。

ホセアというのは、非常に辛い運命を担わせられた預言者でした。イスラエルの民は神さ



まから特に選ばれ、愛された民であったのに、そしてエホバの神さまと一対一の関係の絆で結ばれたにもかかわらず、あだし神々を、偶像を拝んだり、宗教的にフラフラしている。それは宗教的な意味での姦淫だったわけです。それに対する神さまの痛み、心の嘆き、それを本当にわからせるために、ホセアに対して身持ちの悪い妻（ゴメル）を娶らせた。

「買い戻して、そしてその女と一緒に過ごさない」

と。しかしそれにもかかわらず、その女性はまた身をもちくずす。そういうことを繰り返したようです。それは何故かという、そういう体験を通してイスラエルの神さまがどんなに慈悲深い神かということを民に示すためだったということなんです。それがここに出きます。

イスラエルの神ヤハウェが、あだし神々を拜んで宗教的姦淫を犯しているイスラエルの民を、それでもなお自分は棄てないで愛しぬくのだ。おまえ、預言者ホセアよ、おまえもおまえの姦淫の妻を棄てないで愛しぬけよ、とさとした。そこでホセアは妻を身の代金（しろぎん）があがないもどして、妻に言った、「おまえはこれから永く私のところにおちついて、もう淫行（いんこう）などせず、他の人に往ったりするなよ。私もまたおまえに対して同じようにするから」（ホセア3・3）。

預言者ホセアは不貞の妻をとがめず、ねんごろにあしらい、深い愛、あたたかいおもいやりをもって、自分を妻と同じ立場に置き、「私もまたおまえに対して同じようにするから」といった。

ホセアは何も罪を犯していない。けれども、

「私もあなたに対してそうするからと言った」

と、そのところですね。

夫または妻が、不貞の相手に対してこのような心をもって包み得る者は、あかつきの星より稀（まれ）であろう。しかし相手の過去のあやまちを折り出して、詰り責めるのは、冷たいパリサイ根性が、サタンの冷酷な心である。

一般にアガペーというと、単に天的な霊的な精神的な愛と思われ、地的な愛エロースと天地のへだたりがあるように考えられている。しかし本当のアガペー愛はエロース愛の次元にまで深く降りてきて、罪を犯す危機性をもったエロース愛を包んでこれをアガペー愛の中に溶かしこんで変質させる力をもった、どんだ底の愛である。

「何ごとよりも先ず互に熱く相愛せよ。愛は多くの罪を掩えはなり」（ペテロ前4・8）とか、「愛はすべての罪過を掩う」（箴言10・12）とかいう愛がこれである。ホセアに神は別なところでこう告げている。「エフライムよ、我れいかで汝を棄てんや。……わが心わが内（うち）に変わって、わが愛憐（あわれみ）ごとごとく燃え起れり」（ホセア11・8）。神の義が強いだけ、その義の審判を自らの胸にひきつけて（それがやがてキリストの十字架の砕けとしてあらわれた）、より強烈な愛として（のちにキリストの復活と聖霊のそそぎとしてあらわれた）突破、



突入し、燃えあがり、燃えつづけてゆく。

イエスはこの女の次元に自らを置き、地にももの書くすがたをもつて女を包み、罪をどん底からゆるした。「あわれみはさばきに勝つ」のであった。色情を抱いて女を見る可能性を——ほかのあらゆる罪の可能性と同じように——彼ももっていた。しかし罪の可能性はイエスにおいては罪の現実とならなかった。それゆえに彼はゆるしの実力をもっていた。これが本当の「恕」、おもいやりというもので、そのことはヘブル書4・15にある通り、「われらの弱きを思い遣ることのできる」心で、十字架の贖罪に通ずる「大祭司（キリスト）の思いやり」である。

この女はおそらくペンテコステのとき、聖霊のバプテスマにあずかり、イエスの愛の化体した女になったであろう。

●放蕩息子

それからもうひとつ、「破れ」の姿として、「放蕩息子」のたとえ話が出てます。このたとえ話は長いので『無者キリスト』から要点だけを拾い読みさせていただきます。要するに、二人の兄弟がいて、弟はお父さんから自分の将来受け継ぐ遺産、相続財産を先にもらって、一人立ちしようとして旅立って行った。ところが、行った先ですっからか人になってしまった。その弟の姿の描写が凄く実に絵画的に書かれていますので、先にそこを読みあげます。169頁、次男坊の破れというところです。

《放蕩息子（ルカ15・11～32）

次男坊の破れ

顎髭に白髪がまじり始めた親仁が窓辺によって、夜明けにまた夕暮に野末を見やつている。今日も明日も次の日も空しく過ぎてゆく。この親は何を待っているのだろうか。

家には息子がひとりいる。毎日夜良に出て働いているが、いかにも律義者らしいユダヤ的な真面目さがその相貌にうかがわれる。四角四面といった感じである。

と、あるひるさがり、そろそろ陽が傾きはじめた頃あい、ぽつんと一つ動くものがあるか彼方に見えるではないか。あれは人が、野獣か、幻影か。親仁はじっと見詰めて目を離さない。家を出ていったあの次男坊にしてはあまりにも変り果てた姿ではないか。跣足で檻樓をまとうている。正に乞食同然の恰好である。破衣そのもののすがたである。見る影もなく痩せ細ってはいるが、その歩きっぷりから察すると次男坊らしい。直感した親仁は、家を跳び出して走っていった。七十路を迎えた人とは思えぬほどの力強い走り方ではないか。親仁と書くように、正に父の仁が力の秘密であったようだ。

イエスはこの情景を述べて次のようにいった、「彼れ（息子）がなお遠く離れていたのに、彼の父は彼を認め、情動してあわれみ（エスplanクニステー）、走っていった。



その頸に倒れかかるようにして抱きつき(エペペセン)、彼に心ゆくまで接吻した(カテフィレーセン)。(私訳)

普通の親だったら、家の中に坐り込んで、帰って来たとてもない姿の息子に、「どうしたんだ。そんなだらしない恰好で、よくも帰って来たもんだな。」とさんざんひとくさり文句をならべ、それからおもむろにゆるしてやる、といった勿体ぶった段どりをとるところであろうか。ところがこの親仁は、一見さっぱり権威のないやり方である。自分の方から野らへ走って行って、倒れかかるように抱きついて、熱い接吻をしてこれを迎えたとは。

いったいこの次男坊はどうしたというのか。この息子は一本立ちになりたくなった。独立心の芽生えである。それはそれで一応男としてのたのもしい結構なことなのだ。父親から財産を分けてもらった。長男の半分をもらったのがユダヤの習わしであった(申命記21・17)。

彼は荷造りをして間もなく家を辞した。大分遠い国へ出向いた。はじめは金まわりがよかったが、金があるとつきものなのは誘惑である。酒色にふけり出した。そのためとうとう財産を蕩尽してしまった。弱り目に祟り目というわけで、その国が饑饉に見舞われた。そこでいよいよ困り果て、その土地の豪農に身を寄せて糊口の道をやると得た。彼の仕事は豚を飼うことであった。極めて卑しい仕事である。彼の食物は豚と同様の蝗豆である。日に日に痩せ衰えてゆく。これでは死を待つようなものである。ぎりぎりの現実追いこめられて、やっと我とわが身に立ち還った。そして父の家の豊かさが思い出されてきた。彼は自分の在り方の非がしみじみと自覚されてきた。彼の自覚は、まず自分が天に対して罪を犯し、その結果父に対して罪を犯した、破れそのもの、というのである。

天に対して罪を犯したとは何か。人間の在り方が、関係の仕方が、第一に絶対者に対してのものであることを示す。それはあたかも地球とその中の生きとし生けるものが、太陽の存在によって在らしめられているように、人間は信ずると信ぜざるに関わらず、絶対者によって在らしめられているというのが聖書の語る人間存在の大前提根源現実である。神はモーセに「我は在りて在る者なり」と告知したが、私はこれを「我は在りて在らしむる者なり」とよむ(このことについては別のところで詳述しよう)。

そのような「在らしむる神」のめぐみの意志に信頼することをせず、手ばなしの人間主体、人間自主の在り方をしたこの次男坊はいかにも自主自由のようだが、実は自分の慾心の奴隷となった。神の意志の奴隷となるところに、全く逆説的にまことの自由がある、義がある。傍若無神の手放しの自由は逆に罪であり、不自由であり、不義であることはパウロがロマ書、ガラテヤ書で論じ、ルターが「奴隷意志論」をもって

エラスムスの「自由意志論」を論駁した通りであり、宗教体験の根底的な真理である。アダム・イヴの「原罪」も神意に反いたという神話をもつて啓示された人間実存の根底の問題に関わる真理である。この次男坊の在り方は、神との関わり方に於てまず破れたのである。人間の存在的な「破れ」がそこにある。そしてこれは誰でもがもっている破れなのである。万人が罪びとであるとは、このように神意を体現し得ない我執的な存在であるということである。

この放蕩息子ほうとうしこの父に対する信愛関係の断絶、父を父とも思わぬ心、高慢、それが自分の生活に放蕩、破綻はたんという相に結果してきた。しかしこのことに気がついたとき、彼ははじめて神に対し、父に対して罪を犯した、という告白となった。神に対する断絶、これが人間の破れのすがたである。自己の破綻、破滅へと路はおちてゆく。》

拾い読みが少し長くなりましたが、「破れ」の自覚から「砕け」たる魂となることが次の段階である。人間は破れっ放しではなくて——破れというのは人間の側から見た惨めさです——その人間の側からの惨めさを突破口として、

「あつ、神さまに対して実はまちがっていた。親父さんに対してまちがっていた。自分は悪かった」

という、その自覚へ至るのが「砕け」なんです。「破れ」というのはただ惨めだという現実の姿そのものです。現実だけなんです。しかし、それをきっかけにして、

「ああ、自分の在り方が神さまに対して間違っていたんだ」ということを自覚する、これが「砕け」なんです。

内村鑑三は関東大震災の時に、未曾有みぞうの被害と社会的混乱がある中で、

「これは神さまの人間に対する審判だ、審きだ」

ということを言ったものだから、非常に非難を浴びた。

「何と残酷なんだ。人々があんなに苦しんで、あんなに犠牲を払っている時に、『神

の審き』とは何だ!」

と。しかし、あの言葉には内村さんが人間の破れをそこに感じたことが表れている。今まで文化文明を謳歌おうかし、「自由、自由」と言っていた、それが地震と大火事で近代化した首都圏は無惨な廃墟のような姿になった。そこに破れを見た。破れを見ただけではなくて、この事態は人間の今までの在り方が文明中心で、神さまをそっちのけにしていたんだという砕けの心を感じとったわけです。それがあの言葉になって表れた。

日本が太平洋戦争に敗けて、日本全国が廃墟と化した時も——それは破れの姿です——その破れから本当の砕けになったら、本当の救いへと行っただけなんですけれども、破れっ放しで、あとはアメリカの援助だとか、朝鮮戦争を通しての景気回復なんかで、また経済的繁栄のところに行ってしまった。破れから栄えと一足飛びに行ってしまった。本当の砕けがなかったんですよ。それが残念なんです。



私は、阪神淡路大震災が起こった時、破れから碎けへ至ると思ったんですけども、その碎けはついになかったですね。でも、その頃の小池先生のお話をテープで聞くと、やっぱり碎けのことを仰っています。

「これは神さまの愛の鞭だ」

というふうに言われた。それを受けとるのはクリスチャンしかない。普通の日本人は、「ああ気の毒だ、ああ残酷だ、神も仏もあるものか！」

という感じ方である。それからボランティアでいろいろ助け合うという人間的なレベルでその破れを繕って、そしてまた立ち上がっていく。そして同じことを繰り返していく。

だから、「破れ」から「碎け」へ来ないといけない。碎けというのが、日本人には不得手なんです。『破れ』からすぐ「包み」なんです。それが私には残念です。

『無者キリスト』に戻りまして、次男坊の碎けについて先生がどのように書いているか、見てみたいと思います。

●次男坊の碎け

《このような次男坊も、罪の自覚を胸に抱いたとき、彼は碎けのたましいとなった。

この放蕩息子おやじの親仁おやじさんは、彼の「破れ」の奥に「碎け」の相を見た。父のもとに立ち還って来たその姿において。

果然、次男坊はこう告白した、「お父さん、私は天に対し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私はあなたの息子といわれるに値しません。」(私訳)

もう私は息子ではない、あなたの下男として、奴隷として私を使ってほしいというふうに徹底的に碎けたわけです。平伏しているんです。無条件降伏の碎けの魂になった。

おれみたいな野郎は、もう息子でもない、と告白して、自分を吐き棄てるように、自分を悪にくんで平伏ひれふしている。傲慢な手ばなしの自主、独立、自由の彼は、今や無条件降伏の碎けの魂になった。放蕩息子おやじのこのあざやかな逆転、ひっくりかえり。

ルターはあの有名な九五ヶ条の第一条で何と提唱したか。「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改め(回心)をなせ……』と言いつつとき、彼は信徒の全生涯が悔改め(回心)であるべきことを意味し給う」(私訳)と。

少し飛ばしまして、174頁の後2行目から続けて読みます。

ともあれ、この親仁は僕しもべどもに命じて最上の衣を持って来させ、これに着せ、その手には指輪をはめ、

「指輪」というのは親あかしと子の証です。「親である、子である」という証の指輪をはめ、

その足には鞋くつをはかせ、更には肥えた犢うしを屠ほろらせ、饗宴きやうえんを開いて、感謝と讚美にあふれた。次男坊はあまりの恵みに手の舞い、脚の踏むところを知らぬ感謝と感激であつたろう。イエスはしばしば饗宴たの譬えをもって語る。それは彼自身が、ヨハネ福音書



第6章で語っているように、生命のパンであり、生命の葡萄酒であるので、これの人々にわけ与えたかった。イエスの与える生命は聖霊そのものである。無条件のゆるしのもとに必然くるものは無限無量の生命、聖霊である。即ち、立ち還りは饗宴に、回心は聖霊の恩沢にあずからしめる態勢なのである。》

夕暮になって、野良から帰ってきた長男はどうも様子がおかしいので、家僕に訊ねると家を出ていった弟が帰ってきたので、父が歓迎の宴を行っているという。

「二体なんだ、これは。この親父はもう何やってんだ!」
というので、プンプン怒るわけです。

「あれだけ迷惑をかけて、さんざん心配かけた奴が帰ってきて、それを親父は叱りもしないで、このドンチャン騒ぎはなんだ!」

と憤然としているお兄さんの姿がここにあります。177頁です。

●長男のパリサイ根性

《これを聞いて兄は憤然として家に入ろうともしない。父の遣り方があまりにも不公平であり、一方的であり、非常識であると直覚したからである。これを見た父は兄をなだめ、弟を迎えるように勧めてみたが、どうにもならない。兄は次のように不平たらたである。『ぼくは何年もあなたに仕えて、かつて一度だってあなたの言いつけを踏み破った(パレールトン) ことがありません。それなのにあなたはぼくについて小山羊一匹もくださって、ぼくの友達と一緒に楽しませてくださらなかったじゃないですか。ところがこのあなたの息子、

「私の弟」とは言わない。」「このあなたの息子」、このドラ息子が帰ってきたら何ということなさるんですかと。

あなたの放蕩児が、遊女と暮して来たのに、彼のために肥えた犢を屠ってやりなさる

とは!」(私訳)。

この兄の怒りはもつともです、この世的な次元からいえばもつともなんです。ところが、福音の角度からいえば、そうではない。

……福音の世界では自己義認自己弁護は成り立たない。……

しかればこの場合、長男は黙って我慢するよりほかになかったであろうか。そうでもない。長男のとるべき態度があった。それは父と同じ心となって、このみじめな弟をあわれみ、「よくぞ帰って来た。これからやり直しだなあ。大きなマイナスを逆に大きなプラスにするのだなあ!」といって肩を叩いていたわってやるのが、本当に兄貴らしい在り方というもの。

だから父はこの兄に次のように諭している、「子よ、おまえはいつも私と一緒にいるじゃないか。だから、私のものはみんなおまえのものだよ。このおまえの弟、死んだ(も

同然だった) のが、生き甦^{かえ}り、失われたのが、また見出だされたのだから、楽しみ歎^{かな}ばないではいられないじゃないか。」(私訳)

兄は父と同じ屋根の下で生活していた。それで父は兄と財を共有しているのだ、と
いつている。しからば兄は父と心も共有、即ち同心であるべきであった。「父、父た^らば
子、子たり」という言^{こと}が論語の中にあるように、親子がそのように同心であるなら、
この兄は父と共に弟をゆるし迎え、共歎すべきであった。それができなかった兄はそ
れならど^うつという範疇^{はんちゆう}の人間であらう。

結論的に言いますと、人間的に立派すぎてその立派さが災いしている。どうしても、そう
いうだらしないやつ、ダメなやつを審^さいてしまう。人の罪を赦^{ゆる}すことができない、そうい
うふうな範疇^{はんちゆう}の人間になってしまっているようだというわけです。

自己義認^{じぎぎにん}、これをパリサイ根性^{こんせい}という。おのれを義としてどんなに客観的に義であらうと
他を見くだし、審^さく根性^{こんせい}、人の罪過をあばいたり、指摘したり、第三者を批判して人
格を傷つけたりするさもしい心。その人はどんなに立派であらうと、品行方正、学術
優等であらうと、それをイエスはパリサイとし、福音の敵とした。実に使徒パウロ自
身がキリストにひっくりかえされるまでは、このパリサイの権化^{ごんけ}であった。この兄も
そんな根性であったから、自分の弟のことを「このあなたの子」という表現をつかって、
「私の弟」とはいわないのをみてわかる。》

●この譬話^{たとえ}の構造

最後に、この譬話^{たとえ}から何を受けとるかというところを読んで終わりとします。

《兄は道義的、自律的な人間であるがパリサイ性が巢^{くさ}をつくっていた。父との同居は
いかにもよさそうであるが、実は心の距離の遠かったことが弟の帰還^{きくわん}によって曝露^{ばくろ}さ
れた。

弟は自主独立的で一面結構のようだが、父との心の交りが断絶したところに大きな
あやまりがあった。自由が慾心^{よくしん}とからんで遊蕩^{ゆうとう}に墮^だし、破れ^{やぶ}そのものとなった。しか
し純情型であるので、魂^{たま}が砕^{くだ}けて回心^{かいしん}を起^{おこ}した。父から離れた弟は逆に兄よりも父
に近くなった。否、実に父のふところに投身したのである。

父の弟へのかえりみは遠隔の地まで及んでいた。弟はそれを知らない。父は審判^{さばき}を
乗り越えて、愛で包んだ。父の抱きに弟は救われた。箴言10・12「愛はすべての罪過^{つみ}
を掩^{おほ}つ」とある。そ^うついう愛である。第二イザヤにもこ^うつある、

「至高^{いたいたか}く至上^{じつじやう}なる永遠者、聖者と名づくる者かく言い給^{たま}う、我は高き所^{たかき}聖き所に住み、
また心砕^{くだ}けてへりくだる者と共にすみ、謙^{へりくだ}る者の霊を活かし、砕けたる者の心を活
す」(イザヤ57・15)

キリスト・イエスは十誠を満たし得ない人間のみじめさをよく知っている。だから



罪がどうのこうのと、そんな詮索はしない。唯一つのことをのぞんでいる。それは本来、樂園喪失の破れの人間が、この放蕩息子のように心碎けて全身をもつて立ち還ってくるただけである。立ち還る者を無条件に彼はゆるし、包み、抱き給う。罪はみんな私がひきうけた! というのがキリストの大悲である。彼の十字架である。しかもみたまを無量に賜って愛のいのちに化してくださる。これが彼の太慈である。

その後のこの放蕩息子はどうなったか。放蕩息子は心の中でこいつだ、「どうぞ私をあなたの雇人のようにしてください」(ルカ15・19末尾)。その心はこつだ、「どうぞこんな奴ですが、お父さん、雇人のように使ってください!」。神は、キリストは、この棄身の献身の心をいたずらにしたまわらない。世につまはじきとなり、自分も自らに愛想をつかせた奴を、無きが如き奴を、キリストはつかまえて、彼の僕となし、力を与えて神の栄光の器とする。この放蕩息子はもはや肉の息子ではなく、霊の息子とされておのが天賦を無限に鍛えられ聖名のためその後の生涯を燃やし尽くすのである。否、燃えて尽くることを知らぬ白熱の霊火的存在となり、湧きて尽きせぬ霊泉的存在となる。このような人間をキリストの無者と申したいのである。人生はこの無者、修行たるのみ。》

この一番最後のところは、先生は自分の信仰の在り方と重ねて仰っているように、私には映りますね。つまり、先生が言いたかったことは、

「人間はみな五十歩百歩なんだ。自分も罪びとのかしらだ」

と、よく、

「人間小池を見るな。人間小池をあがめないでほしい。人間小池をかいかわらないでほしい」

と言われた。だから、先生も自分の弱さとか、自分のいたらなさを充分自覚しながら、それでいていつも十字架のもとに平伏して、平伏すごとに深いものを受けとって、そしてそれを告白された。

「この自分の内面の様子を本当に知ってくれる者はいないだろうね」

という、そういう思いがあつたんだろうと思う。

それが人間同志の交わりでの限界なんですね。人間は、人間を本当の意味で理解すること、本当に知り尽くすことはできない。夫婦であろうと、師弟であろうと、兄弟であろうと、親子であろうと、みんな或るところに壁がある。それが人間としての限界なんです。

「でも、主は、イエスの愛は、キリストの赦しはそれを突破して、無条件で赦し包み抱いてくださっている。私もこうして赦され、抱かれた人間だ。あなたもそうだ。だから、握手できるね」

と。これが先生の言いたかったことなんです。

「十字架の下で握手しようじゃないか。お互いを百%理解することはできない。し

かし、十字架の下だったら握手できる。聖霊は棄て給わない。聖霊は赦し、担い、生命を与え、輝かしてくださる。だから、贖われた人間は罪びとにして義人、死に至るまで罪びとであり、義人。賜りたる義、無を賜って、そして光輝いていく。そういう矛盾構造の中にいる」

ということを言い続けてこられたんですね。私たちもいろんな人と対しますけれども、そういう時に先生が告白されたことをいつも心の隅に置いて、人に対する時に直情的に、感情的にパツと反応するのではなくて、少し距離を置いて、

「主よ、どうぞ、彼を赦してやってください。同時にまた私の至らぬところもお赦しください。主よ、私は十字架の贖いをいただいた人間です。徹底的に赦された人間は徹底的に人を赦さねばなりません。しかし、それは肉ではできません。だから、主よ、救ってください。肉ではできません。生まの「生まれたままの」私はできません。けれども、あなたがそれをさせてくださる時が必ずきます。私は自分の力ではできません」

という気持ちになることです。

「そういう無者修行だ」

と先生は言われる。人間小池という先生が、また他の人たちをどれだけ赦しておられたか、そのことは知りません。先生も、

「あいつは癪にさわる!」

と怒っておられたですから。けれども、そうでありながら、御霊の主にある小池、無者キリストの中にいらつしやる小池先生は赦しておられた。そういうふうに、人間というのはどこまでも矛盾構造の中にいるんですね。だから、先生は、

「誰も理解してくれなくても、キリストだけは私をわかってくださる。キリストだけは私を百%知ってください」

と、よく言っておられたですね。

「人の心腸を見たもう神」

という、内面を本当に知ってくださいる神。「汝知り給う」というタイトルの小論が「エン・クリスト」9号にあります(1982年5月春季号 詩篇第139篇「汝知り給う」(私訳と解説))。本当に短い、3、4頁のものですけれども、あれは実に深い内容です。神が知り給う知り方は審くために知るのではない。愛して赦し命づけるための知り方です。人が知る知り方は審くための知り方であることが多い。まあ検事さんなんていう役目はそういう役目なんですけれども(笑)。サタンの役目は粗を捜す役目なんです。キリストのなさることは執り成しなんです。ローマ書8章にあります。

「誰が彼を罪に定めるのか。キリスト・イエスは天上にあつて我々のために執り成してくださっている。キリストに贖われた者を誰が審くことができるか」



とあります。そんなふうに、一方でサタンというのは我々の良心に働きかけて、

「お前はダメだ、お前はダメだ」

と自分を責めるようにするんです。良心は、それ自体はいいんですけれども、それがサタンに刺激されて、良心が目覚めて、そして私たちを審こうとする。それに対して聖霊は、パラクレートス、^{たすけぬし}助主、赦し主、どこまでも執り成してくださる。その聖霊の執り成しの中で人は生かされていくんです。だから、もう自分を見ない。ただ主さまにすがっていくという、それが私たちの姿なんですね。

それでは、今日はこれで、第一回を終わりといたします。

● 祈り

それではご一緒にお祈りしたいと思います。

主イエス・キリストさま、今日はこうして久しぶりに『無者キリスト』を取り出し、兄弟姉妹と一緒にその核心でありますところの、「福音から見た人間の七相」、「破れ」、そして「砕け」へと至る、人の心と人の姿。そして、それを憐れみ包み給うあなたの無限無量の^ご愛。それにまた新たに触れさせていただきまして、感謝でございます。

主さま、あなたの御言は今も生きて働いています。我々の破れを包み、そして砕け得ない我らを徹底的に十字架で砕いて、そして赦して、数限りなく赦し、そしてあなたの聖霊の愛をもつて包み、聖霊を我らに宿らせて、我らをまた愛の人、赦しの人としてくださいましたことを感謝いたします。肉なる我らはどこまでも赦すことのできない、人を審き拒絶する性^{さが}をどうすることもできませんが、それを十字架がぶっ飛ばして、本当に

「汝、我に在るべし。わがうちに居れ。わが愛に居れ。あなたを新しいあなたに創り変えていくからね」

と。聖霊の生命をくださって、私たちを新しい人にしてくださいましたことを感謝いたします。どうぞ、あなたと同じ心で、

「キリスト・イエスの心を心とせよ」

と、その姿で我々を形作っていつてくださいますように、導いてくださいますように。

今日来ておられない方々の上にも、どうぞ、あなたの豊けきみ恵みが深くありますように。主イエス・キリストの御名にあつてお祈りいたします。アーメン。

